



名取市史 どより

第3号

山の上の経塚群

名取市の北西にある高館山は、名取川から阿武隈川まで市域をまたいで南北に広がる高館丘陵の北端に位置しています。熊野那智神社は高館山の山頂付近に鎮座しているため、市内の各所から社殿の東に立つ神門を見ることができます。

熊野那智神社は、明治31年(1898年)7月に拝殿の修繕工事に際して地面の下(土中)から再発見された、160点ほどの懸仏かけぼとけでもよく知られています。懸仏とは、神仏習合の思想によって、神社で神体として祀られていた鏡に仏像や種子しゆじを線刻したり、また立体的な仏像を取り付けたりしたもので、神の本地(正体)は仏であるとする本地垂迹ほんじすいじやくの考えから「御正体」とも呼ばれます。熊野那智神社の懸仏は、おそらく、明治初年の神仏分離と、それに続く廃仏毀釈はいぶつきしやくの世相において、損壊を避けるため土中に隠されたのだと思われます。なお、このうち37点の懸仏と4点の鏡が国の重要文化財に指定され、122点が宮城県の有形文化財に指定されています。

これらの懸仏に鎌倉時代後半のものが多いことから、熊野那智神社が鎮座する場所は当時より信仰を集めていた霊地であったことが窺えます。それを裏付けるように、熊野那智神社の北側には南北50メートルほどの範囲に複数の経塚が存在していることが知られており、「熊野那智神社経塚群」と呼ばれています。

経塚とは文字通り経典を埋めた塚のことです。仏教には、釈迦の死から2000年(あるいは1500年)が経つと、その教え(法)が衰退する時期(末法)になるという考えがあります。日本では永承7年(1052年)がその始まりの年と考えられ、平安時代には釈迦の法を次代に残すため、書き写した経典を埋めて塚をつくることが始まりました。最初の経塚は藤原道長かみこうが寛弘4年(1007年)8月11日につくった金峯山経塚きんぷせんとされています。

市史編さん事業では、令和6年(2024年)11月下旬から12月上旬にかけて、熊野那智神社経塚群を調査・発掘しました。この調査によって、従来は8基ほどと考えられていた経塚は、最大で13基に及ぶ可能性があることがわかり、そのうちの4基を発掘することで経塚の構造と複数の遺物を発見しました。これらの発見から、熊野那智神社経塚群は、おそらく鎌倉時代(早ければ平安時代末期)には造営が始まったと想定されます。

今回の発掘では、「三耳壺さんじこ」と呼ばれる、壺の上部(肩)に3つの取手(耳)の装飾が付く壺が見つかりました。専門家の鑑定によれば、この三耳壺は「古瀬戸」という陶磁器の中期様式にのっとったもので、13世紀末から14世紀初めのものであろうということです。



熊野那智神社神門の遠望
(麓の高館吉田から)



鎌倉時代につくられた懸仏
(熊野那智神社所蔵)



今回の発掘で見つかった
三耳壺



発掘現場の関係者向け見学会の様子
(令和6年12月4日開催)

* 題字背景の写真は熊野那智神社経塚群の発掘現場からの名取市の眺望です。

名取市史最前線

令和6年7月7日から9月22日まで市歴史民俗資料館において、なとり市史企画展「THE 横穴墓わーるど —熊野堂横穴墓群の世界—」を開催しました。名取市に遺されている横穴墓について紹介し、熊野堂横穴墓群の資料を展示しました。雷神山古墳や飯野坂古墳群といった古墳が造られた時代（古墳時代前期）を経て、そうした古墳が造られなくなった時代（古墳時代終末期）に遺された横穴墓がどういったものなのか、市民の方々に関心をお持ちいただきました。『河北新報』や『なとらじ801』でも紹介され、多くの方に足をお運びいただきました。

また、11月9日にはなとり市史講演会「東北・関東の終末期古墳から見る七世紀」を開催し、市史編さんに携わっていたいる東北大学総合学術博物館の藤澤敦教授（市史編さん委員、市史編さん専門部会〔原始・古代〕部会長）を招き、東北と関東の7世紀について話していただきました。



なとり市史企画展で展示した熊野堂横穴墓群からの出土遺物



なとり市史講演会での藤澤敦先生によるご講演



東北・関東前方後円墳研究会研究大会での会員による白熱した研究発表

また、共催事業として11月9日・10日の両日に「第27回 東北・関東前方後円墳研究会 宮

城大会 副葬品から考える古墳時代終末期」を開催し、最新の研究成果を報告していただきました。講演会および研究会には300名を超える方々にお越しいただき、盛会となりました。

市史編さん室ではこれからも企画展や講演会を開催いたします。ぜひ、ご参加ください。



名取市の魅力を再発見！

一名取と中世城館一



川上大館跡の調査
左の高まりが土塁（土を固めた防壁）
（令和6年1月13日）

市史編さん事業では、令和5年（2023年）から、市内にある中世城館跡の調査を行っています。

高館城跡（高館吉田、市指定史跡）は文献上に表れる「羽黒城」や「名取要害」と考えられています。熊野那智神社に接し、県内でも屈指の規模を持つ中世城館の跡で、伊達家家臣福田氏の居城として知られてきました。城跡には土塁・三重の空堀・曲輪などの遺構が残っています。

川上大館跡（高館川上）については文献記録が残っていません。しかし、その立地から、かつて菅生（村田町）へと繋がる道を管理していた重要な場所であったとも考えられます。

市内の城館跡を調査することで、中世名取の地域社会の解明や、地域の魅力の再認識につながることを期待されます。中世城館跡をめぐる調査の成果は新『名取市史』の中世・近世編に掲載する予定です！

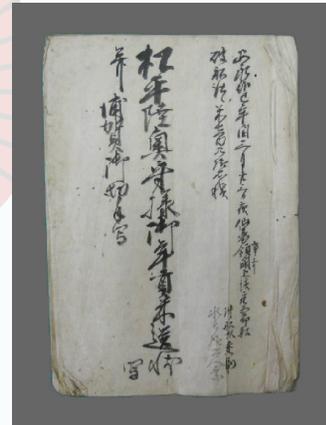
江戸時代の 閑上湊 と 閑上船

井上 拓巳

(市史編さん専門部員[近世])

江戸時代の閑上は仙台藩の湊^{みなと}として街場を形成して、栄えていたことが知られています。閑上湊については『閑上風土記』などで叙述されており、その一端がわかっていたのですが、市史編さん事業を進める中で、新出史料の分析から、新たな閑上湊像が浮かび上がってきました。閑上湊には大型の廻船^{かいせん}（人や物を運んで湊を廻る船）が所属していて、仙台藩の廻米^{めぐまい}（コメの輸送）などに従事していました。また閑上湊の住民は、閑上船やその他の廻船に乗り込み、海上輸送を行っていました。

海上での活躍の一方で、閑上船は輸送中の事故と常に隣り合わせでした。閑上湊に係る破船事故について紹介したいと思います。安永2年（1773年）に房総半島沖で破船した閑上船の記録が千葉県文書館に残されています。この記録によれば、閑上の重五郎所有の廻船16人乗りが安永元年12月に石巻で仙台藩の廻米等約900石を積みこんで出発し、翌年の1月16日に江戸の深川（東京都江東区）まで輸送を行い、仙台藩の役人に廻米を引き渡しています。1月下旬には仙台藩領内へ戻るため、江戸を出発しました。途中、2月24日頃に上総国奥津湊（千葉県勝浦市）へ到着したものの、悪天候などにより仙台藩領内へ戻る事ができずにいました。なんと奥津湊を出発できたものの、閏3月23日の夜に奥津の東に位置する鵜原村付近で破船してしまいました（閏月は季節と暦のずれを調整するため旧暦で数年に1度設けられた月）。この時に、事故についての取り調べが行われた結果、破船に関する記録が残されました。

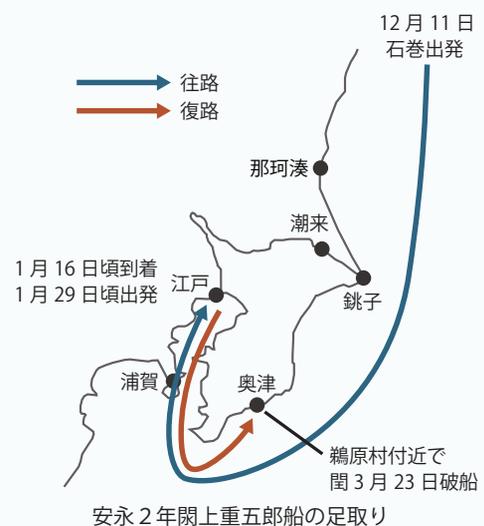


安永2年閑上船に関する記録
(柴代家文書ア409、
千葉県文書館所蔵、
許可番号：6-県-23)

廻船は悪天候のために漂流することもありました。寛政6年（1794年）には閑上湊の大乗丸という廻船がベトナムまで漂流しています。大乗丸は石巻で盛岡藩の廻米を積み、江戸へ向かっていたところ、房総半島沖で遭難し、3か月ほどの漂流を体験しました。宝暦11年（1761年）から翌年にかけて荒浜（亶理町）の福吉丸が中国に漂流していますが、この廻船には閑上と藤塚の水主（船乗り）が乗り組んでいて、過酷な漂流や異国体験を経て、最終的には帰国することができました。

このように閑上の廻船や住民が、破船事故に遭遇したり、漂流を体験したりするなど、過酷な出来事に出会う場面が確認されています。閑上の廻船や住民は、仙台藩の廻米をはじめ、幕府や盛岡藩の廻米を行うなど、活発に海上輸送を行っていました。海上輸送をするにあたって、破船事故や漂流はいつ起こってもおかしく

なかったはずですが、こうした危険性にも関わらず、積極的に海に乗り出していました。このような閑上の廻船や住民の拠点として、閑上湊は機能していました。商品流通や漁業なども盛んに行われていた閑上湊について、市史編さん事業の中で明らかにしていきたいと思っています。



市史編さん室の資料調査と収集

市史編さん室では、鋭意、様々な資料を調査・収集しています。古文書などの紙資料は、所蔵されているご家庭にとって大事なものであるため、調査のために借用させていただき写真撮影などの作業をさせていただいてから、返却しています。なお、返却の際には、下の写真のような、資料の長期保存に適した資材(専用の箱や封筒)に納めて返却いたします。

自宅や地域の集会所などに資料を置いておくと、将来的に捨てられてしまったり、無くなってしまったりすると心配される方からは、大事な資料を寄贈いただいたりもします。こうした寄贈資料は市史編さん室で大切に保管しています。

「こいなのあるだけ」という方はぜひ市史編さん室まで、じゃんじゃんもりもりどしどしずんずん、情報をお寄せください!

寄贈資料の一例

植松南明神講様にご寄贈いただいた講帳など。

江戸時代の資料も含まれ、地域における講(決まり事をもった地域の集まり)の役割をいまに伝えています。



名取の歴史に
触れられる場所
ジンジャー
～メジャーな神社編～

* 明治になると地域の神社は「県社」、「郷社」、「村社」といった「社格」を付与されながら整理されていきました。この図には県社、郷社、村社とされた神社のみ掲載いたしました。市史編さん事業では地域の神社についても調査を進めます。図中の神社以外でも情報をお持ちの方は市史編さん室までご連絡ください。

